

## 第10回自転車セミナーを開催しました！

第10回目のテーマは、「カメラと自転車のステキな関係」ということで、自転車好きでありカメラマンでもある、有限会社大前事務所の取締役の 大前 仁氏 にご講演いただきました。

大前氏は、1965年埼玉県川越市の出身で、ツアー・オブジャパン、アジア選手権、ツールド北海道、ジャパンカップの公式フォトグラファーを歴任し、ツールド・フランス、ツールド・ランカウイ、全日本選手権、ツールド・おきなわ、ツールド・熊野などをオートバイから撮影し、その作品は、国内外自転車専門誌や広告写真、カレンダー等に使用されています。

コンテジ（デジタルカメラの中でもコンパクトさが特徴の比較的手軽に扱うことができるタイプのカメラ「コンパクトデジタルカメラ」の略称）でのサイクリングから、一眼レフでのツアー・オブジャパンの撮影など、カメラの楽しみ方について、雑談をまじえてご講演いただきました。

日時：平成24年3月15日（木）18：00～19：30

場所：自転車会館3号館11階会議室



会場内の様子



大前講師

### <要旨>

大前氏は、高校生の時にサイクリングを始め、当時は、本に興味があったため、将来は、本屋を目指す職業としていたため、埼玉大学を卒業後は、出版関係を志しました。写真を趣味としていたため、自分で撮った写真を仕事にも活かしたい思いがあり、写真とサイクリングを合体させたい気持ちに抱かれ、サイクリングやロードレースの写真を撮ることになったそうです。

本日の講演内容は、以下の3点です。

- ・カメラの楽しみ方について
- ・サイクリングの写真について
- ・ロードレースの写真について

#### ①カメラの楽しみ方について

本日持参したコンパクトデジタルカメラは、撮影結果を確認しながら使用できる反面、機能面では、若干、一般のデジタルカメラに比べ性能が劣るとのことです。持ち運びが手軽でフィルム代も要らず、写真をウェブサイトへも掲載可能。持参機は、ニコンP-300という機種で価格は2万円程度で、マニュアルで撮影でき絞りやシャッタースピードも自由気ままに首から下げての撮影も可能。更に高機能を求めるならデジタル一眼レフがお勧めだそうです。

#### ②サイクリングの写真について

サイクリング写真の撮り始めは、ニューサイクリングのグラビアの影響を受けてということで、様々なパターンに対応して、撮影方法があるみたいです。

\*走行自転車の撮影方法として

- ・走行してくる自転車の前方に待機
- ・下ってくる走行自転車は、適切な場所に自転車を止めて待機
- ・流し撮りの場合、シャッタースピードは、1/60から1/8に設定  
(更なる細分化は1/250でもOK)

\*自転車本体の撮影方法として

- ・スタジオで撮影する場合、10mmの亚克力棒で自転車を自立
- ・自立不能な場合、他人に自転車を立て掛けてもらい、離れた瞬間に撮影
- ・戸外で撮影する場合、平坦な場所に自転車を斜め向きに配置

#### ③ロードレースの写真について

1990年の世界選手権の撮影から始まり、91年の全日本選手権・95年のツールド・フランス、直近では、2010年の世界選手権にて新城選手のゴール地点を撮影

なお、ゴール地点を撮影するには、様々な障壁があるみたいです。

- ・まず、プレストールになることであり、かつ同地点には、20人程しか待機できず、日本人は、砂田譲氏の僅か1人で、達成するのに何十年もかかる
- ・最前列でなくても、鉄柵の間であれば、観客を避けて撮影可能
- ・ツールド・フランスに至っては、高所（ひな壇形式）から撮影するのが、一般的だが、場所も限定されるため、道路上のカメラマン（限定20人）より上方より撮影可能だが、

300mmの望遠レンズを使用しなければならず、それ以上のレンズを使用する場合、高価になるため、テレコムバーターを利用することにより焦点距離を2倍に変更可能

また、カメラマンは、ランク付けされており、エプロン状のビブスの色別着用でランクが異なる。最下位のランクは、白色であり、一段上は、薄水色となっている。

・パリのシャンゼリゼ地点では、ひな壇形式でなく、道路を閉鎖してカメラマンが待機しての撮影が可能のため、撮りがいがあるが、周囲に観客がいる場合、観客も撮影してしまうため、プレス担当を呼び、観客を移動してもらう場面は変わり、2009年のツアー・オブジャパン東京ステージでは、1秒間に8コマ連写撮影可能なニコンD2-Hにて新城選手のゴール地点での逃げ切り写真を撮影したとのこと。再び、ツールド・フランスの話に戻り、選手が上り坂に直面した時は、広角レンズを使用するとともに、選手の走行地点により、レンズの選定を行う。失敗した場合には、コーナーのイン側で構えるなど、対策を考える。

例えば、広角レンズをやめてコーナーの外側から流し撮りにて1/60秒に設定。逃げ集団の写真は、価値がないため、前方や横向き等、様々な角度から撮影するなど。

なお、先日、完成した伊豆ベロドロームで開催されたトラック室内コースでのレース写真は、左に新城選手、右側に別府選手の2人がもがき合いながらの熱戦となった。

\*背景を中心とした写真を撮影する場合⇒晴天時に良好な撮影が可能になるとは限らないため、雲の位置にも注意して、空の部分比率も考慮すると、選手は、下方部分に入れのがベスト。

なお、ツールド・フランスの場合、毎年コースが変更されるため、知らないコースだとレース展開が予想不可能となるため、撮影地点の選定次第では、ギャンブルとなるが、その場合は、背景が手助けしてくれる場合がある。

\*スタート地点前⇒関係者以外がシャットアウトされるため、シャンゼリゼ地点は、観客が一切入場できないようにクローズするため、カメラマンも撮影場所の確保が困難となるが、警察官に直接交渉して入場が可能となる場合もあるが、基本的には、選手が到着する前に関係車両が駐車場に入る前にバリアフリーとなり、その一瞬を利用する方法がある。

\*山岳ステージ⇒観客が道路を占拠してしまうため、撮影場所を確保するために、常に機材を携えて歩くことになるが、その場合、観客がカメラマンを選手扱いしてくれるため優越感に浸れるという恩恵がある。

なお、各ステージを自動車で移動の場合、基本的に乗車中からの撮影は、困難（安全性等の観点）であるため、オートバイから自転車レースを撮影するのが賢明であるとの

ことである。以前、日本では、オートバイから写真を撮影する文化がなかった。

\* オートバイからの撮影の利点

- ・自動車と異なり、自転車程度の幅の空間があればオートバイでの移動が可能で撮影できる。
- ・ツールド・北海道は、ステージ毎に街から街へ移動するため、取材に自動車を使用すると、迂回路しか使用できずレースを観戦できないが、オートバイなら観戦のみならず撮影も可能である。

ツールド・フランスでは、大手の通信会社が有名なカメラマンしか撮影できない。

(全体で16名程度)

しかし、オーガナイザーに申請すれば、日替わりで貸与するオートバイがあるため、希望ステージを申請するとドライバーと一緒に撮影が可能となる。

但し、欠点があり出発地点まで自分で戻らなければならないため、その場合は、信頼できるドライバーを探すのも方策である。

一方、ツールド・おきなわでは、撮影距離の関係上、オートバイから撮影時に200mmの望遠レンズを使用する機会が多い。

\* 撮影時体制の注意点

- ・両肩にカメラを掛け、ストロボは落下しやすいのでテープで固定
- ・不測の事態に備えてウエストポーチに予備のレンズを収納
- ・悪天候時等のレンズ内への水滴の侵入に備えて防水機能が保てる他乾燥状態も維持可能なジップロック等への収納

事実、北京オリンピック開催時は、オートバイ同乗者は、カメラは収納したままで出しても1台で、ゴール地点では、別のカメラを使用する。さらに、カメラメーカーのサービスデポが出展する場合、カメラを含めた部品の交換も可能となる。

以上をもって本日の講演終了後、質疑応答となり、以下の質問が寄せられた。

▼自転車を撮影する場合のアクリル棒の使用方法について

⇒後輪のカメラ側から見えにくいハブ軸のロックナット付近にて自立させる

▼アマチュアカメラマンとしては、どのあたりにレースの撮影場所を確保したらいいのか？

⇒撮影対象を想定し、以下の方法による

- ①景色を含む場合→ ロケハンの実施
- ②選手限定 → 選手の通過地点を予測して待機

最後に、同氏の写真が多数掲載された書籍「自転車工房」が、本年7月に八重洲出版より販売され旨お伝えし、終了となった。

次回（平成24年度）の「自転車セミナー」は、平成24年6月から平成25年3月まで、毎月1回、計10回の開催を予定しております。

以 上